



# ある論法



川崎ゆきお

「寒いねえ」

「冬ですから」

「明日も寒いだろうか」

「寒波が来ているから、それが去るまで、まだ寒いですよ」

「じゃ、緩むか」

「去ると緩むかと思いますよ。ところで高田さん……」

「何かね」

「高田さんは天気のことばかり言ってますが」

「あ、誰でも言うだろ。寒い日は寒いって、まあ、挨拶代わりだよ」

「いや、高田さんと世間話を長くしていますが、あまり社会的な話はしませんねえ」

「そうかなあ」

「海外で戦争や紛争があったり、色々あるでしょ」

「うちは家庭で紛争中だな」

「ああ、それは大変だ」

「だからじゃないけど、海の向こうの知らないところの紛争まで抱え込めない」

「でも、ニュースなんかで、大きく取り上げられていますよ」

「世界中のことを気にし出すと、きりがないだろう」

「まあ、そうなんです、社会常識として」

「ニュースにはならないけど、もっと色々なことが世界中で起こっていると思うよ。それを一つ一つチェックし、心配したり、気にかけていたのでは忙しくて仕方がないじゃないか。それに、うちは家庭紛争中でね。先ずはそこから解決しないとね」

「国内でも色々大きな災害が起こっていますが、それにも高田さんはあまり触れないですねえ」

「そうかなあ、大変だなあと、言ってるけど」

「それだけですか」

「何が」

「だから、募金をしたり、手伝いに行ったり。困っている人を助けるような」

「困っている人なら近所にいくらでもいますよ」

「ああ、分かります。そういう論法」

「そんな論法があるのか」

「遠くて薄い縁の人達に対しての方が、色々善意を施したいというような感じですよ。近いと駄目なんですよね。これが」

「そうだね。他人に優しくするように、家族にも優しくしてもらいたいよ」

「それは高田さんのお宅での、家庭の事情ですねえ。それも論法なんです」

「え、どんな論法だい」

「先ずは自分のことを、という論法です」

「自分だけかい」

「家族もです」

「家族だけかい」

「近隣に対してもです」

「近隣だけかい。まあ、それでも随分と広いけどねえ」

「要するに、期限限定の善意の行為はストレス解消になるんですよ。そういう論法です」

「ストレスねえ」

「違う論法もありますよ。まあ、人を助けたりするのは、気持ちがいいんです」

「ああ、それはあるねえ」

「いい人になれます」

「それはどんな論法だい」

「色々な論法の中の一つです」

「そんなに沢山あるの。それじゃ、何とでも言えるねえ」

「個人が世間とどう関わっていくかの論法ですよ」

「最低限でいいんじゃないかい」

「だから、それも論法なんです」

「便利だね。論法って」

「高田さんは、見て見ぬ振りをする論法です。だから、色々なことが社会で起こっていても、見ない振りをする。つまり、ないものとして過ごす。そういうことです」

「きつい論法だね」

「ああ、それはパターンでしてね。それで行動パターンが分かるんですよ」

「嫌な話だねえ」

「それに向かい合うわけですよ」

「ああ、しんどいねえ」

「そうですか」

「だから、天気の話でいいんじゃないか。ややこしい話をするとめめるよ。それに大した知識も持っていないんだから」

「まあ、そうなんですが」

「そうだろ」

「論じるとめめる。それが嫌なんだよね。私は」

「今も」

「もめてますよ」

「あ、そうですか」

「君はもっと大人だと思ったけど、違っていたか」

「こういう話、青臭いですか」

「いやいや、私が悪かったのかもしれない」

「はい」

「天気以外の話をすればいいんだろ。たまには、政治や社会の動きについても挟むよ」

「あ、はい」

「それだと、誤魔化せるだろう」

「そういう意味では」

「私が油断していた。ガードが甘かったようだ」

その後、この二人は出合っても口をきかなくなった。

了